

ESSAY
ときどきの少年
五味太郎



ときどきの少年

五味太郎

Libro

ときどきの少年

定価一〇〇〇円

昭和五七年九月二二日第一刷発行

著者——五味太郎◎

発行者——小川道明

発行者——株式会社リプロボート

東京都豊島区東池袋三の一の一 サンシャイン 60 51 F

〒一七〇 電話 〇三—九八三—六一九一

印刷所——誠和印刷株式会社

製本所——島田製本株式会社

ISBN4-8457-0074-3 C0095 ¥1000F

1981 Printed in Japan

五味太郎 ごみたろう
一九四五年、東京生まれ。
絵本作家。工業デザイナー
から絵本の創作活動に入り
ユニークな作品を数多く発
表。服飾デザイナー、作詞
家としても、新境地を拓き
つつある。絵本『仔牛の春』
『12か月のあかちゃん』『み
んなうんち』『ことばのあい
うえお』エッセイ集『とり
あえず、絵本について』な
どがある。

ときどきの少年

目次

鉦石の熱	7
ハンカチ	18
氷	28
合　　唱	40
カーテンの向こう側	45
砂の感触	57
映画の街	64
クロス・プレー	75
後ろの子供	83
おじいさんの石鱈	91

ひとさらい——96

レギュラー・ポジション——105

包丁屋——109

桜の空地——116

ぼくたちの収穫——122

若旦那の刺青——132

陽炎——139

色の庭——146

野球カード——150

低速進行——159

T 君 166

テレビの日 172

硬 貨 180

お山の大將 186

水色の高射砲 194

玩具の髑髏 199

蟬 210

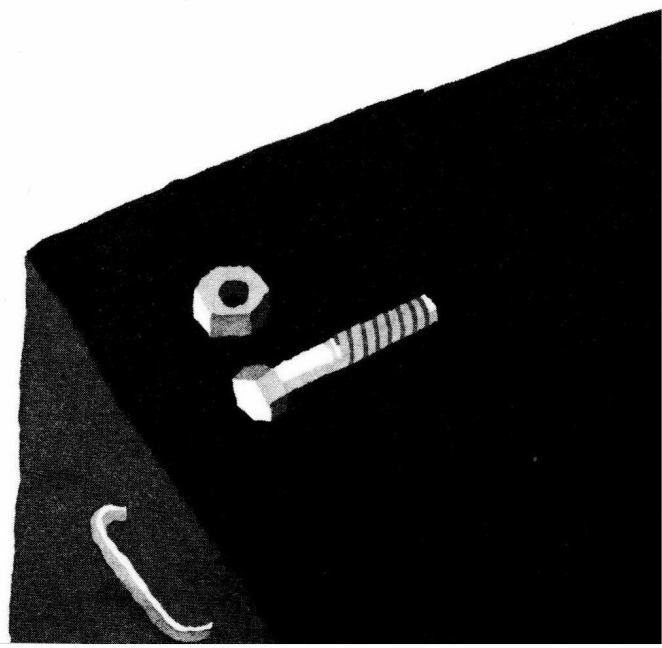
金^{きん}さんのこと 215

雪 224

曇り空 230

少年の悩みと

装幀・挿画 ― 五味太郎
文字デザイン ― 小林
隆



鉋石の熱

鉋石ラジオはアンテナが勝負である。かの秋葉原から遠く隔たった小さな町で、ぼくたちが手に入れられる鉋石といえ、文房具屋がついでに商う実験道具などというものなかに紛れこんでいるような代物であるから、その二、三種類の存り物からどれを選ぶうと性能に差が出るというようなこともない。そして同調コイルも抵抗もイヤホンもだいたそんなものであるから、鉋石ラジオの製作競争は自から、残されたアンテナに焦点がし

ばられてくる。いや、その前にもひとつの競争がある。それは組み立て方であって、同じ素材を駆使するより他にない状況では、それをいかにコンパクトに、かつスマートに組み込むかがおおいに問題になる。

当時はようやくプラスチック製の函などが世の中に出廻りはじめた頃であって、ぼくは母親の化粧品かなにかの透明の小函に、見事に組み込んだものだ。それはごく小さいもので、同調コイルの心棒が少々はみ出してしまふほどのものであったから、ぼくは苦心慘憺して函に穴を開け、そこからちよつと心棒を出したのだが、それがかえって漸新なデザインとなつて仲間の評判を呼んだものだ。透明の函の中にそれこそびっしりと組み込まれた部品は、ちよつと見にはたいした雰囲気であり、いかにもハイ・パフォーマンスな受信機に見えた。でもそこは文房具屋の埃をかぶつた部品であるから、性能はそれ以上問えない。そこで問題になるのが同調コイルの端子に半田^{はんた}づけされたビニール被覆の細いコード、つまりアンテナである。誰のラジオにも二本の線が出ていて、一本はイヤホン、もう一本がアンテナだ。ぼくのコンパクト設計のラジオにもやはり同じように二本の線が出ていて、その一方を耳に、もう一方を函の胴体に取りつけた針金の棒に接続するというスタイルで

あった。耳の方のイヤホーンはそれなりの製品であって、特に問題はなく、問題はあくまで針金製のロッドアンテナである。こいつがどうもよろしくない。突き出す角度をあれこれと、それこそラジオを持って体ごと方向を変えて奮闘するのだけれど、鉱石検波のラジオが充分作動するだけの電波がつかめない。それでも微妙な角度の綾で、時には馬鹿にはつきりとイヤホーンが鳴ったりするものだから、ぼくたち鉱石ラジオボーイは、校舎の中や校庭を針金のロッドアンテナを角にして、道に迷った虫のごとく徘徊するのであった。

そして運よく電波を捕えたラジオ虫は、その捕えた角度のままびたりと停止して、まさに聞き耳をたてるわけだ。けれども聞き耳をたてたところで、昼日中きこえてくるのは株式市況か天気概況、はたまた人生講話の類だから、今をときめくウォークマンの軽快な動きとはだいぶ様相を異にして、ピタリと姿勢を固定してラジオボーイが佇むのも、ただアンテナのせいばかりとはいえない。

なにはともかく、アンテナから飛び込んだ電波というやつが、磁性棒とコイルで同調されて、鉱石と抵抗というやつで検波されて、このコードを伝って、こうしてイヤホーンを震えさせているんだということを体験することで精一杯であって、聞こえてくるものの内

容を検討している暇など少しもないのだ。それに時々、まさに偶然といった感じで同調したFEN放送のカントリー・ミュージックの馬鹿々々しいほどの陽気さに思わず体が揺れれば、たちまち電波は針金アンテナを滑ってしまふのだから、いずれにしても鉱石ラジオ少年は佇むよりほかにはない。だから我が身をアンテナと一体化してじっと佇み、ところの中だけで乗りまくるという術を、ぼくたちは会得していた。それは三〇年近く経た今もまだ残っている感覚であって、デューク・エリントン・ビッグバンドの目眩くフォービートの前で、四拍子に鼓動するところに反して動くことを躊躇する体は、もしこのままに動けば、この音を逸してしまうのではないかと恐れているからなのだ。そしてここがスウィングすればするほど身は固くなって、それがまさにかつて鉱石ラジオ少年であったことの証しのように思えるのである。

鉱石ラジオ少年は動かない。じっと中空に眼を据えてひたすら耳に神経を集中させる。そしてちよつと動いてまた止まる。第二期に入つて、ぼくたちは虫から犬になった。それはぼくたちがその性能の不安定さに限界を感じて、針金ロッドアンテナを使わなくなったからだ。その代わり、アンテナに接続していたビニールコードをフリーの状態にしておい

て、アンテナの役目をしそうな種々のものに直接さわらせるという手を使うようになった。それはたとえば、電柱を支えている補助ケーブルであり、屋根づたいに延びているはずの雨樋のはけ口あたりであり、あるいは鉄の塊であるところの自動車のボディであつたりした。なにしろ金属ならば何でもよかった。ただ金属の種類となるとこれはよく判らなくて、いちいち試してみるより手はなく、ただなんとなく、いかにも金属らしく光っているものや、それなりに大きいものは、まあ電波を受けやすくアンテナになるんだということあたりが判っていただけなのだ。

だから犬であつた。耳にイヤホーンを差し込んで、片手に持ったラジオの端からたれ下がったビニールコードの被覆をむいた先端を、もう片方の手でとりあえず、あちらの電柱の支線、こちらの看板、そっちの鉄柵、あっちの金網という具合にとりとめもなく触らせながら歩きまわる犬であつた。そしてそれなりによく聞こえる物体に巡りあうと、そこで止まってしばらく耳を傾け、再び次なるアンテナを求めて移動してゆく。Wさんの垣根の鉄柵はA級のアンテナであつて、Kさんの工場の裏の廃材置場に積まれた鉄板はそれ以上であつた。赤い錆の出た見かけによらず、その鉄板はイヤホーンが壊れるかと思われるほど

のアンテナで、鉱石ラジオにも音量調節器が必要なのではないかと思われるほどの代物であつた。

アンテナを種々いろいろ変える音量調節器を考案したらどうかと、本気に考えたのもそんな道すがらであつた。でも鉱石ラジオ少年ではあつても、そのまま科学少年というほどのことはなかつたから、そんな調節器の考案はもとより、新型ロッドアンテナの試作さえ具体的には無理であり、ただ犬のごとく電波の匂いを探しながら、道をジグザグに歩いてゆくばかりであつた。そして金属とおぼしき代物だけではなく、ついでに並木の幹や植木鉢の花、あるいは道に落ちてゐる吸い殻から野良犬の頭にまでビニールコードの端をくつつけながら歩いてゆくぼくは、さしずめ電波探知器少年であつた。

そんな探知少年も、授業中は作業を中止せざるを得ない。それはもちろん、教師が許さないというのが第一の理由であるけれども、もうひとつ、昔の学校の机、椅子というやつはことごとく木製であつて、身の廻りどこを捜しても金気のものが見あたらないという理由があつた。アンテナになりそうなものは全くといっていいほどないのだ。けれどぼくは教師の目を盗んで、そつとイヤホーンを耳に入れてみる。そして触れさせようにも相手が

いないビニールコードを、だらりと下へ垂らしておく。そして鼓膜に神経を集中させる。すると、鼓膜の奥のずっと向こうの暗い部屋の中で、誰かが何か喋っている気配がする。否、気配ではない。聞こえるのだ。何だか楽しそうな、それでいてちよつと必死な様子で、誰かが喋っている。ビニールコードそれ自身もたしかにアンテナには違いないから、その銅線のハケの先から電波が滑り込んでくるのだろうが、それはなんとなくラジオの中から聞こえてくるような心持ちがする。そういえば鉱石ラジオには電池は入っていない。まして電燈線を引き込んだりもしない。それにオン・オフのスイッチもない。

鉱石ラジオは機械ではない。他からエネルギーをもらって働くような機械ではない。それは生き物だ。こちらが聞こうが聞くまいが、いつも自から喋っている。それはまったくの物理であつて、鉱石と抵抗とコイルとが、いやラジオそのものが電波を喰つて喋るのだ。ぼくは片方の耳に指で栓をして、ラジオの喋る声を聞いた。

——ははは、それはしかたないじゃないですか。

という声が聞こえた。すると別の声がか言つたが、それはよく聞きとれなかった。

——ははは、それはしかたないじゃないですか。

とまた言った。そして次は聞きとれず、

——ははは、それはしかたないじゃないですか。

という言葉だけが繰り返して聞こえた。それは何度も何度も繰り返しつついて、問いの声はどうしても聞きとれなかった。

——おい、そこは何してる。

という声がラジオから聞こえてきたのではないことはすぐに判った。それは指で栓をした耳の方から聞こえ、教師の声に違いなかった。ぼくは反射的にイヤホーンを机の下の物入れに押し込んで立ち上がった。ぼくの口が、

——しかたないじゃないですか。

と喋った。

——なに？

と教師が言った。

——しかたないじゃないですか。

とぼくの口が繰り返した。でもそれはとても小さな声量で、喋るというよりつぶやくよう